

## NEWSLETTER

No.25

2011年6月1日

会長 山梨正明 事務局 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町

京都工芸繊維大学 基盤科学系言語・文化部門 田中廣明 研究室内

psj.secretary\_at\_gmail.com <http://www.pragmatics.gr.jp>(旧<http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行 支店名:009 当座口座番号:130378 口座名:日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 高木佐知子

★ 会員の皆様、いかにお過ごしでしょうか。本年3月11日に発生いたしました東日本大震災とそれに引き続く余震、また、原発問題などで、被害を受けられた方にお見舞いを申し上げます。

日本語用論学会 Newsletter 第25号をお届けします。さる4月3日に第47回運営委員会が開催されました。重要なお知らせとして、**会長メッセージ**、**第14回大会のお知らせ**、**ホームページの移転**、**大会研究発表の申し込み方法の変更**などがあります。

=====

《会長メッセージ》

## ★語用論の新たな可能性

山梨正明 (京都大学)

去る3月11日に発生した東北関東大地震の犠牲となられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますと共に、被災された多くのおみなさまとご家族の方々に、心よりお見舞いを申し上げます。日本語用論学会は、伝達のメカニズムの研究に関わる知的探求の場ではありますが、この混乱する現在ほど、人と人との心の交流、人の身になって考える共感的な伝達が求められる時代はありません。また、現在ほど、適切で正確な情報の伝達が求められる時代(メディアリテラシーに関わる伝達の問題が問われる時代)はありません。一般に、語用論の研究は、言語学の一分野として位置づけられ、とすれば狭い意味での言葉の側面に研究の焦点が置かれる傾向にあります。しかし、言葉は、伝達の手段の一つの側面に過ぎません。語用論の研究は、ヴァーバルな媒体としての言葉だけでなく、ノン・ヴァーバルな伝達の手段、具体的な発話の場面、話し手や聞き手の心理、社会・歴史・文化、等の背景を考慮しながら、(人と人との心の交流

を含む)伝達のメカニズムを明らかにしていく研究分野であります。この点を考慮しながら研究を地道に進めていくなれば、語用論の研究は、人と人との心の交流、共感的なコミュニケーション、適切で正確な情報の理解と伝達のメカニズム、等の研究にも貢献して行くことが可能です。未曾有の震災を経験した私たちの社会と私たちを取りまく世界は、現在、今まで以上に人間的な心の交流、共感的な心の交流を必要としています。日本語用論学会が、この方面の研究にも貢献できる重要な役割をになう学会としてさらに進展していくことを、心より願っております。

★★★★★★★★★★★★

## 《事務局より》

## ★ホームページの移転について

新しいホームページのアドレスが

[www.pragmatics.gr.jp](http://www.pragmatics.gr.jp)

となりました。現在、学会ホームページを運用している国立情報学研究所の学協会情報発信サービスが、平成24年3月で終了するため、これまでサーバの移転について検討してきました。その後、東日本大震災の影響で国立情報学研究所のサービスが不安定になっており、サーバの移転を前倒しし、[www.pragmatics.gr.jp](http://www.pragmatics.gr.jp) としました。新しい情報はこちらをご覧ください。

## ★第14回大会発表募集のお知らせ

2011年度の第14回大会は、以下のとおり開催されます。なお、東日本大震災の影響を考慮して、当初予定していた慶應義塾大学から京都外国語大学に会場を変更して行うことといたしました。大会講演、特別シンポジウム、シンポジウムは以下のように決定しました。

■2011年12月 3日(土)~4日(日)

■京都外国語大学

(<http://www.kufs.ac.jp/>)

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

TEL 075-322-6012 (大代表)

・大会講演 (招待講演者) John Du Bois先生  
(University of California, Santa Barbara) 講演  
タイトル: 追ってお知らせいたします。

・特別シンポジウム: 12月3日(土) 午前: 「災害とコミュニケーション (仮題)」

・シンポジウム: 12月4日(日) 午後: 「語用論とその関連領域 (仮題)」 (シンポジウムの講師  
その他は追ってご連絡いたします)

つきましては、「研究発表」、「ワークショップ」、「ポスター発表」の発表者を募集します。  
会員の皆さま、ふるってご応募下さい。

以下に応募要領を示します。大幅な変更  
(EasyChairを利用したオンライン申し込み)が  
ありますので、詳しくは、本学会ホームページ  
の「年次大会: 研究発表募集要項」

<http://www.pragmatics.gr.jp/cfp.html>

を必ずご覧の上応募してください。

#### ★応募要領

今年度から、発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じとなります。

申し込み原稿は、用紙サイズをA4とし、日本語の場合は2,500字以内、英語の場合は500 words以内で作成してください。参考文献は文字数の制限に含めません。

様式は自由としますが、所属と氏名は記入しないでください。ファイル形式は、Microsoft Word形式(doc、docx)か、PDF形式(pdf)しか受け付けておりませんので、あらかじめご了承ください。ワークショップの申し込みについては、代表者が全員の発表要旨を一つのファイルに取りまとめてください。

★発表形態 口頭発表: 発表25分+質疑応答10分  
ポスター発表: 1時間40分(掲示時間)

ワークショップ: 1時間40分、特定のトピックについて3名以上の団体(司会者を含む)で応募(ワークショップは団体発表のみに変更になりました)。

★発表言語 日本語もしくは英語。

#### ★応募締切

2011年8月20日(土) 必着

★申し込み資格 発表の申し込みは会員に限りま

す。第一発表者が会員でない場合、必ず申し込みと同時に入会の手続きをしてください。入会方法は、こちらのページを参照してください。

★申し込み制限 単独発表・共同発表にかかわらず、一人の会員が第一発表者として申し込みできるのは、一大会につき1件のみです。また、第一発表者としての申し込みがある場合、共同発表は自身が第一発表者であるものを除いて、1件のみです。第一発表者としての申し込みがない場合、共同研究の第二発表者としては2件までに限られます。

★選考について 選考および研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は10月10日以降のなるべく早い時期に投稿者に通知します。

★問い合わせ先 E-mail: [presentation-at-pragmatics.gr.jp](mailto:presentation-at-pragmatics.gr.jp)

(大会運営副委員長・小山 哲春 宛)

投稿に関するお問い合わせは、できるだけ時間に余裕をもってお願いします(8月13日頃まで)。締切り直前のお問い合わせには適切に対応出来ない場合がございますのでご了承ください。

#### ★応募方法

2011年の年次大会より、EasyChairを利用したオンライン申し込みとなります。下記アドレスからアクセスしてください。必ずアクセスの仕方を上記サイト「年次大会: 研究発表募集要項」からご確認の上、ご応募ください。

EasyChair for PSJ2011:

<https://www.easychair.org/account/signin.cgi?iid=41742>

#### ★ The 14th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan

[http://www.pragmatics.gr.jp/conference\\_e.html](http://www.pragmatics.gr.jp/conference_e.html)

Data: Dec. 10th and 11th, 2011

Venue: Kyoto University of Foreign Studies (Access)

#### Call for Presentation

##### 1. About presentation

Presentation Type: Lecture presentation: Lecture 25 min. + QA 10 min.

Poster presentation: 1 h 40 min.

Workshop: 1 h 40 min. (Organization only).

##### 2. Language: Japanese or English

The guidelines for abstract submission:

1. The deadline for submitting abstracts: August 20th, 2011

## 2. Online submission page: EasyChair for PSJ2011:

<https://www.easychair.org/account/signin.cgi?iid=41742>

**3. Submission of Abstract:** Abstracts for paper presentation are invited on any aspects of pragmatic analysis from a variety of fields, including historical pragmatics, cognitive pragmatics, interface of pragmatics and other disciplines, interlanguage pragmatics, social pragmatics, comparative or contrastive pragmatics studies.

All abstracts (which must be in English) must be submitted electronically at online submission page, as attachment files in MS Word format (\*.doc, or \*.docx) and if possible in PDF format (\*.pdf).

The length of an abstract should be approximately 500 words, not including references, figures, tables, and/or graphs.

- Lecture presentation
- Poster presentation
- Workshop

## 4. Notification of the result of selection: by October

**5. Contact person: E-mail: presentation -at- pragmatics.gr.jp**  
(Tetsuharu Koyama)

### Online submission page

Please access the following page.

**EasyChair for PSJ2011:**

<https://www.easychair.org/account/signin.cgi?iid=41742>

### How to create an account of EasyChair

**To use EasyChair, you should first create an account.**

1. Access "EasyChair for PSJ2011", then click "sign up for an account".
2. Step 1: Captcha.
3. Step 2: Fill out the following fields: First name, Last name, Email. Then, click "Continue".
4. "Account Application Received" will appear.
5. If you get an email, click an URL. Please input your account name and password, then, click "Create my account".
6. Your account will be created.

### How to submit at EasyChair

1. Access EasyChair for PSJ2011, then sign in EasyChair by your account.
2. Click "New Submission".
3. Fill out the following fields. Author: Title, Abstract and Other Information: Category: Type of presentation - Lecture presentation
  - Poster presentation
  - Workshop

Group: Presentation language - Japanese  
- English

### Keywords:

**Topics: Choose within two topics.**

- deixis and reference
- pragmatic inference
- speech act
- politeness and socio-linguistic approaches
- cognitive linguistic approaches
- relevance theory
- pragmatics and grammar
- pragmatics and language education
- discourse analytic approaches
- conversation analysis, ethnomethodology
- historical pragmatics
- others

**Upload Paper: You can submit only word format file or pdf file.**

**4. Click "Submit"**

### ★ 第13回大会総括

第13回大会は2010年12月4日～5日に関西大学で行われました。

参加者(発表者を含む)197名

### 平成22年度(2010年度)大会会計報告

収入	
大会参加費および資料費 (新入会員から徴収の年会費を除く)	618,000
懇親会費 (64名×4,000円)	256,000
関西大学より補助金	210,500
大会論集	1,000
収入計①	1,085,500
支出	
印刷費	592,137
郵送費	7,200
事務局経費	341,524
人件費	207,500
会議費	104,700
文具費	29,324
講師経費(謝金・旅費等)	378,539
懇親会	315,000
支出計②	1,634,400
①－②	▼ 548,900

## 平成 22 年度決算報告(案)

収入	前年度繰越残高	
		4,142,610
年会費 (3月30日振り込み分まで)		
		2,440,000
振込み分 (480口)		
一般	424口 (@5,000)	2,120,000
学生	68口 (@4,000)	272,000
賛助	8口 (@6,000)	48,000
大会参加費		436,000
現会員	155口 (@2,000)	310,000
非会員	42口 (@3,000)	126,000
懇親会費 (64口 (@4,000))		256,000
関西大学		210,500
大会論文集		19,500
その他 (『語用論研究』印税等、年会費差額)		71,144
合計		7,575,754
支出		
印刷費 (大会プログラム・ポスター・インク・学会誌等)		1,382,499
郵送費		118,770
事務局諸費		656,716
人件費 (学生アルバイト)		207,500
会議費		396,582
文具費		50,534
その他 (手数料など)		2,100
研究会助成金 (2グループ)		40,000
講師渡航費・謝金等 (4名)		431,539
懇親会		315,000
合計		2,944,524
次年度繰越金		4,631,230

## ★大会論文集の電子化について

大会論文集(Proceedings)を電子化して、ホームページで公開すること、冊子体のほかに CD-ROM で配布することを検討してきましたが、このたび以下のように進めることになりました。

## (1)「大会発表論文集」のダウンロード

大会での配布より 2 年間経過した大会論文のうち著者の許諾が得られたものについて、ホームページその他で PDF の形式で制限なしで公開することにいたします。第 8 回 (2005 年) 大会 (創刊号) と第 9 回 (2006 年) 大会 (第 2 号)

について公開することを考えております。なお、公開 (公衆送信権) の許諾については、ニューズレターやメーリングリスト等で周知して、事前に許諾を得ることにしますが、著者から許諾の得られない論文は電子公開から除外します。

## (2) CD-ROM の作成

現在大会時に配布している『大会発表論文集』については、大会参加者が紙媒体の冊子版か CD-ROM 版のどちらか一方を選択して受け取れるようにします。なお、紙媒体は予約制とし、紙媒体予約専用のメールアドレスを作り、予約制については、ニューズレターやメーリングリスト等で周知することになります。

## ★ 入退会希望、住所などの変更について

これらについては事務局にお知らせください。ホームページの 1 ページ目をご覧ください。

## ★ 第 13 回大会で発表された方へのお知らせ

『大会発表論文集』(Proceedings)第 6 号に掲載する論文原稿の提出方法と提出締め切り、送付先等については、おって、発表者にお知らせします。締め切りは 2011 年 8 月 11 日ですので、よろしくお願いいたします。詳しくは、本学会ホームページをご覧ください。

## ★ Announcement to Presenters at the 13th Annual Conference

(Additional information on the deadline, method & address of submission)

Request of submitting the manuscripts for the proceeding of the 13th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan(PSJ) (VoL.6)

[For participants who presented papers in English]  
See our website in detail.

## ★会計監査委員の交代について

学会規約「3 章第 16 条 会員の中から会計監査委員を 1 名選出する。任期は 2 年とし、1 期に限る。」により、これまでの会計監査委員・村田和代先生 (龍谷大学) から深田智先生 (京都工芸繊維大学) に交代していただくことになりました。任期は、平成 23 年 4 月 1 日から平成 25 年 3 月 31 日までです。

## ★ 第 4 回講演会報告

2011 年 3 月 6 日にキャンパスプラザ京都にて、Elizabeth Traugott 先生の講演会を開催し、約 120 名の参加が得られ、フロアとの議論も活発に行なわれ、盛会のうちに終わりました。

## ★ 会費納入のお願い

今年度の会費をお願いいたします。納入をお願いいたします。なお、昨年度の会費をまだ納入されていない方もよろしくをお願いいたします。同封の用紙をご覧ください。

### ★ 会費の振り込みについて

会費の振り込みにつきましては、未納の方は同封の振替用紙で11月末までにお払い下さい。振替用紙が同封されている方は、今年度分が未納の方です。同封されていない方は、すでに納入済みですので結構です。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払い下さい。なお、行き違いがある場合は、ご容赦下さい。会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっています。

なお、今年度は、学会当日にも学会費の支払いを受け付けます。新入会員の方も大会の際に受け付けます。年会費は、一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円です。振込先は以下の通りです。

1. 同封の振替用紙で支払う場合：郵便振替口座：00900-3-130378（ゆうちょ銀行）

口座名：日本語用論学会

2. 他銀行のATMから振り込む場合：ゆうちょ銀行 支店名：099 当座 口座番号：130378

口座名：日本語用論学会（ただし、振り込み手数料がかかります。ゆうちょ銀行のATMからも振り込みが可能です）

3. ATMからの銀行振り込み：三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 高木佐知子（ただし、他銀行からは振り込み手数料がかかります）

1はこれまで通りですが、2と3の支払い方法も可能となりました。ご活用ください。ただし、特に2の場合は、事務局会計には、カタカナのお名前しか通知されません。また3の場合は、通常は通知がありません。お手数ですが、振り込みと同時に、事務局会計（高木佐知子（大阪府立大学）：psj.treasurer\_at\_gmail.com）とCcで事務局補佐（野澤元（京都外国語大学）：psj.assistant\_at\_gmail.com）にお払いの年度とお名前、会員番号、所属、住所（また、所属、住所に変更がある場合も同様）をメールでお知らせいただければ幸いです。

なお、国外からのお振り込みには、  
[http://www.jp-bank.japanpost.jp/kojin/tukau/kaigai/okin/kj\\_tk\\_kg\\_sk\\_gaikoku.html](http://www.jp-bank.japanpost.jp/kojin/tukau/kaigai/okin/kj_tk_kg_sk_gaikoku.html) (日本語版)  
[http://www.jp-bank.japanpost.jp/en/djp/en\\_djp\\_index.html](http://www.jp-bank.japanpost.jp/en/djp/en_djp_index.html) (英語版)をご使用ください。

《SIG (Special Interest Group) 関連報告》

### 2010年度研究会（SIG）活動報告

#### (1)「モダリティ研究会」

今年度は、関西外国語大学で「言語学談話会」を隔週で開催した。言語行為、主観性、直示、視点、推意、情報構造、条件性、仮想性などに関する会員の研究発表を通し、モダリティと主観性／主体性との関係、モダリティと他の意味論的カテゴリーとの関係、モダリティとコンテクストとの関係などを実証的に検証した。また、会員間や会員以外の先生・院生との意見交換を通し、モダリティに関する様々なトピックを多面的な角度から議論した。

来年度は、これまでの研究成果を踏まえ、英語学、日本語学、スペイン語学の3領域からモダリティにアプローチし、(i)モダリティの一般的な定義とは何か、それはどのように分類されるか、(ii)モダリティは他の意味的カテゴリー（未来性、因果性、条件性、証拠性、仮想性、驚嘆性（mirativity）、恩恵性、情報構造など）とどう関係しているか、といった問題を考察する。澤田治美、久保進、和佐敦子、岡本芳和、澤田治、澤田淳、片岡宏仁、長友俊一郎の各氏が研究発表を行う予定である。

#### (2)「話し言葉の分析研究会」

##### 1) 研究会の目的

話し言葉の分析に関わる理論的枠組みと実際の分析について検討を行う。

##### 2) 2010年度の活動報告

中心的な活動として、Deborah Cameron (2001) “Working with spoken Discourse”の翻訳本作成のため、各自が担当章を決め、翻訳に取り組んだ。全体ミーティングでは、具体的箇所の内容の議論や、翻訳用語や表現検討を行った。また、全体ミーティングの他に、担当の章ごとにチェックのパートナーを決め、当事者間で相互に個別の検討の機会を数回持った。翻訳本は、2011年度冬までには出版できる予定であることから、今年度でこの研究会を解散することになった。また、全体ミーティングでは、翻訳本の検討以外に、若手研究者を招き、談話分析に関する独創的な研究を聴き、今後の研究につながる有意義な議論をすることができた。

<全体ミーティングでの研究発表の内容>

2010年9月22日（水）（於：大阪学院大学）

午前の部 Cameron 翻訳検討会

”Working with spoken Discourse”の翻訳について検討。翻訳に際する注意点、用語などの検討。索引用語の抽出、6章、12章の翻訳内容検討

午後の部 研究発表

発表者：鈴木大介（京都大学大学院）

タイトル：「法副詞の機能分析－談話の観点を中心に－」

2011年3月16日（水）（於：大阪学院大学）

午前部 研究発表

発表者：小川典子（京都大学大学院）

タイトル：「指示表現から談話標識へー「そりゃ（あ）」を事例として」

午後部

“Working with spoken Discourse”の翻訳最終校正について報告。今後の作業の確認。

### 《『語用論研究』編集委員会より》

#### ★『語用論研究』への応募の審査結果と12号の発行について

語用論研究第12号が発行されて、会員に発送されました。論文二本と、White先生の特別寄稿論文と、Haberland先生とHorn先生の去年の大会での講演が収録されています。

第13号は、3月末までに4本の投稿があり、また、締め切りを5月15日に延長したので、さらなる投稿があると見込まれます。締切延長にともない、査読には少し遅れが出るかもしれませんが、年内の発行を目指したいと思っています。奥田先生とTraugott先生からの寄稿が予定されているほか、書評も今まではこちらから特定の先生にお願いしていましたが、一般会員から募集することを考えています。分野については広く偏りのない形で論文が載るよう期待すると意見があり、場合によっては、評価基準を一律にせず、分野に偏りがないように配慮するか、今まで扱われてこなかった分野を特集号で取り上げるといったことも検討しています。さらに、外部査読の依頼が難しいので、学会員を中心に査読委員を登録する方法も検討している。現在、編集委員は6名いますが、Schourup先生に副委員長をしてもらっているほか、もう一人森山(卓)先生にも副委員長をお願いしました。

#### ★『語用論研究』への投稿の募集

##### 【編集委員会からのお知らせ】

学会誌『語用論研究』では、会員の皆様の投稿をお待ちしています。投稿は随時受け付けておりますが、査読のため3月末日を一応の区切りとしています。尚、第11号からは、日本語と英語のどちらかの言語による応募となっています。英語原稿については、英語版の投稿規定をごらんください。

#### ★『語用論研究』投稿募集

##### 『語用論研究』投稿規定

1. 投稿は会員に限るものとする。（会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること）

2. 投稿原稿の種類は、a. 「研究論文」(research paper)、b. 「研究ノート」(research note)、c. 「ディスカッション」(discussion note)の3つとする。
  - a. 「研究論文」：独創性と新規性があり、語用論研究の進展に貢献する実証的或いは理論的研究。
  - b. 「研究ノート」：更なる展開を念頭においた萌芽的論考や、当該分野の研究を活性化させる契機となりうる知見をまとめたもの。
  - c. 「ディスカッション」：本学会の刊行物である『語用論研究』や『大会論文集』をはじめ、語用論研究と関連する分野の学会誌等に掲載された論文、研究ノート等に関する学術的な所見・反論等。
  - d. (投稿の際には、原稿の種類を指定すること。但し、編集委員会は審査後にその種類の変更を求めることがある。)
3. 投稿論文は未発表の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同時に複数の論文を投稿することや、同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かるような書き方は避ける。
4. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
5. 投稿は1年中受け付けるが、当該年度の号の最終投稿締め切りは、毎年3月31日とする。
6. 採否決定を9月末日頃とする。
7. 枚数、書式など。
  - ・原稿枚数：「研究論文」はA4、横書き、20枚以内。「研究ノート」はA4、横書き、10枚以内。「ディスカッション」は5枚以内。何れの種類も、注、参考文献を含む。
- a. 書式：1ページ、日本語の場合は32行38文字とする。英語の場合は1ページ、1行70ストローク、1ページ32行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や参考文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入は可能。
- b. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケでアブストラクト（英語で、1行70ストローク、8行以内）、さらに2行アケでキーワード、そのあと2行アケで本文を続ける（ただし、「ディスカッション」については、アブストラクト、キーワードは不要）。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名、謝辞を書かない（掲載決定後に編集委員会より指示する）。

- c. 例文の前後は1行アケル。  
 d. 各節の前は1行アケル。  
 e. 注は、1, 2, 3のように、括弧を用いない数字だけとする。  
 f. 見出しのサブセクション番号は、1.1.のように、数字の後にピリオドを置く。  
 g. セクションの「はじめに」または「序論」は、1. ではじめる。  
 8. 注は参考文献の前にまとめて付ける。  
 9. 参考文献(参考文献、引用文献という言い方はしない)の書式は以下の例にならう。  
 Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.  
 Hooper, P.J. 1979. "Aspect and foregrounding in Discourse." In T. Givon (ed.) *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.  
 Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.  
 小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京:三省堂.  
 無藤 隆. 1983. 「言語とコミュニケーション」、坂本 昂(編)『思考・知能・言語』(現代基礎心理学)、第7巻、161-189、東京:東京大学出版会。  
 野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」、『言語』、24: 2 (2月号)、62-69。  
 変更: ed. → (ed.)
10. 参考文献に関する注意事項  
 参考文献は本文中で引用したもののみとする。  
 a. 英語の文献、日本語の文献を混在させて、アルファベット順に並べること(別々に分けない)。  
 b. 共著者の場合、英文は & を使わず and、日本語は・(なかぐろ)とする。  
 c. 雑誌については日本語、英語とも、巻数、号数、ページ数を明記する。  
 d. 英語の文献名で、語頭については、内容語は大文字、機能語は小文字とする。第1語の語頭のみ大文字で、あとは小文字という形式はとらない(上記8の英語の参考文献の書式参照)。  
 e. 採否決定前の投稿論文に投稿者本人の著作を多数挙げて、本人と分かるような書き方をしない。
11. 提出部数: 原稿は6部提出する。(コピーで可)。  
 12. 抜き刷りを希望する場合、費用は執筆者の負担とする。  
 13. 執筆者構成は初校のみとする。校正の際の内容にかかわる原稿への加除は認めない。

14. 「原稿ファイル」とは別に、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX番号、e-mailアドレスを記載した「個人情報ファイル」を作成する。この二つのファイル共、ワード及びPDFの両方で作成する。

#### 15. 送付方法と送付先:

「原稿ファイル」及び「個人情報ファイル」を下記宛て送付する。送付は、1)ファイルを添付した電子メールか 2)ファイルを保存したフロッピーディスク等の(書留)郵送のいずれかとする。

送付先:

【電子メールによる場合】

journal-at-pragmatics.gr.jp (注意: -at- を半角の@に置き換えて下さい)

(『語用論研究』編集委員長 林 宅男)

(原稿送付の際は、確実に受信できるように、出来るだけ無料メールアドレスのご使用をお控えください。)

注意: 電子メールによる送付の場合、送信後、2週間経っても、原稿を受理した旨の確認返信メールが無い時には、必ず、こちらからの確認返信メールがあるまで、takuo-at-kcc.zaq.ne.jp (-at- を半角の@に変換)に連絡してください。

【郵送による場合】

(「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと)

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1

桃山学院大学 林 宅男

TEL: (0275) 54-3131 Fax: (0275) 54-3202

16. 掲載決定後に、最終原稿を3部上記の宛先に郵送し、同時に最終原稿の添付ファイルを、上記のメールアドレスに送付する。提出原稿は原則として返却しない。

★『語用論研究』13号発行に向けての「書評論文」の一般公募のお知らせ

『語用論研究』の中の書評論文につきましては、いままでは、適宜、一部の方に懇意の形で執筆をお願いしてきました。しかし、次号(13号)につきましては、より広い分野の書物を紹介していただく目的で、一般会員からの応募を受け付けることになりました。書評論文の長さはA4用紙で参考文献、注等を入れて約10ページとし、原稿の提出期限は8月31日とします。尚書式等につきましては、「研究論文」等の投稿規定に従ってください。尚、他の論文同様、書評論文にも審査があります。

★Call for paper for Studies in Pragmatics

The Style Sheet of English papers for Studies in Pragmatics

### 1. Manuscripts

a. This journal only accepts contributions from members of the Society. Non-members may apply for membership by contacting the business office, secretary -at- pragmatics.gr.jp (Replace "-at-" with "@").

b. Submissions of three categories will be considered:

i. Research papers: empirical or theoretical studies which make a new and original contribution to the development of the field of pragmatics.

ii. Research notes: articles reporting on work still in the early stages of development, or intended to stimulate studies in a particular area.

iii. Discussion notes: findings or critical comments responding to research papers or research notes that have appeared in Studies in Pragmatics, in the Proceedings of the Society's Annual Meeting, or in other publications related to the field of pragmatics.

(Authors should specify a category at the time of submission; however, the editorial committee will determine the final categorization after examining the manuscript.)

Papers submitted to Studies in Pragmatics must not have been published previously, nor should they be under consideration for publication elsewhere. Authors may submit only one manuscript at a time for consideration. Papers that will be presented at the annual convention may not be submitted.

c. Manuscripts must be written in such a manner that the authors cannot be identified. Authors' names and contact information should appear on a cover sheet separate from the rest of the manuscript.

d. All manuscripts should be submitted on A4 size paper.

e. Manuscripts on A4 paper should not exceed the following lengths, including notes and references: research papers, 20 pages; research notes, 10 pages; discussion notes, 5 pages.

f. Type in 12-point font, 32 lines to a page.

g. Leave margins of 2.5 cm (1 inch) on the right and left, and 3 cm on the top and bottom.

h. For authors whose native language is not English, it is advisable that, prior to submission, manuscripts be corrected and edited by a qualified native speaker of English.

i. Authors are responsible for the first proofreading only. Corrections should be limited to typographical errors.

j. Authors may purchase offprints of their articles.

k. On a separate coversheet, please indicate the title of the paper, author's name, e-mail address, affiliation & position, and postal address. Authors are requested to submit the manuscript file and the

coversheet file in both WORD format and PDF format by e-mail or by regular mail.

l. If submitting by regular mail, save the manuscript file and coversheet file on floppy disk or other storage medium and send by a registered mail.

m. Address where the manuscripts should be sent:

<e-mail>:

journal -at- pragmatics.gr.jp ( Replace "-at\_" with "@" ) (Dr. Takuo Hayashi, chief editor for Studies in Pragmatics)

Please refrain from sending manuscript files using a free mail address, so that they should be received without problem.

If, after submitting a manuscript by e-mail, you do not receive confirmation of receipt of your manuscript within two weeks, please send an e-mail message, requesting such confirmation, to: takuo \_-at- kcc.zaq.ne.jp ( Replace "-at-" with "@" ).

<regular mail>:

Dr. Takuo Hayashi (chief editor for Studies in Pragmatics)

Momoyamagakuin University (St. Andrew's University)

1-1, Manabino, Izumi city, Osaka, 594-1198, JAPAN

n. Submission deadline: Submissions are welcome at any time, but manuscripts for a given year's issue must be received by March 31st of that year. Submissions received after that date will be considered for the following year's issue. Submitted papers are refereed and authors are notified of the results around the end of September.

### 2. General Format

Abstracts:

a. a. Abstracts should be not more than 8 lines (about 100 words) in length.

b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract itself should be preceded and followed by two blank lines and should begin with the word 'Abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 keywords should be given below the abstract, preceded by 'Keywords'.

c. (An abstract and key words are unnecessary in the case of discussion notes.)

The Main Text of the Paper:

The introductory section or prefatory remarks should be numbered from 1, not 0. Subsection numbers should be followed by a period (e.g., 1.1.).

Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.

Notes:

If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list.

Notes should be indicated with Arabic numerals (1, 2, 3, 4) without parentheses.

References: References should be typed at the end of the paper. Cite only works quoted or referred to.

The titles of books and articles originally written in Japanese should be transcribed in Roman letters and supplemented by English translations in brackets.

The format for references (including order of elements and punctuation) should be consistent with the following examples:

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Hooper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon (ed.)

*Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.

Koizumi, T. 1990. *Gengai no Gengogaku: Nihongogoyoron (Linguistics of Implied Meaning: Japanese Pragmatics)* Tokyo: Sanseido

#### ★Call for book review

This is a special call for book review articles to be published in *Studies in Pragmatics*. In the past, book review articles were written only by invited authors. For the next issue (No.13), however, we have decided on an open call to the entire membership, hoping that in this way we will be able to introduce books from a wider range of fields. Review articles should be no more than ten pages (A4 size) in length including notes and references, and should be submitted by August 31, 2011. For details on the format, please refer to the Style Sheet of English papers for *Studies in Pragmatics* above. Submitted book-review articles will also be refereed before accepted for publication.

#### ★お詫びと訂正

日本語用論学会『第12回大会論文集』(第5号)に以下のような間違いがありましたので、謝罪しますとともに訂正をいたします。

訂正表

[誤]

日本語用論学会 第12回大会発表論文集 第5号 2009年12月5・6日(土・日)

目次: ポスターセッション(日本語発表)  
進行形の丁寧用法・・・・・・・・・・中西充一 293

Table of Contents

**Poster Sessions: Presentations in Japanese**  
Mitsukazu NAKANISHI: English Progressive and "Politeness"・・・・・・・・・・ 293

p.293 進行形の丁寧用法 中西充一 大阪大学院

[正]

日本語用論学会 第12回大会発表論文集 第5号 2009年12月5・6日(土・日)

目次: ワークショップ

進行形と語用論 司会: 沖田 知子

進行形の丁寧用法・・・・・・・・・・中西充一 293

Table of Contents **Workshop Sessions**

Progressive and Pragmatics Chair: Tomoko OKITA  
Mitsukazu NAKANISHI: English Progressive and "Politeness"・・・・・・・・・・ 293

p.293 ワークショップ

進行形と語用論 司会: 沖田 知子

進行形の丁寧用法 中西充一 大阪大学院

★《新刊案内》( )内の解説はamazon.comその他新刊書紹介からの文章です。宣伝文は各新刊書をご覧の上、内容については各自でご判断ください。

綾部保志・榎本剛士・小山 亘 2009.『言語人類学から見た英語教育』東京:ひつじ書房。(英語教育のみならず言語教育に関わる者にとって、文法とは一体何であり、コミュニケーション(言語使用)が行われることで、私たちの社会・文化がどのように構築されているのか、と問い直してみることは意義深い。本書は、これらの問題を一貫的に説明し得る、記号論系言語人類学の包括的な言語コミュニケーション理論を初めて呈示した書である。その上で、日本の英語教育産業や英語教科書に潜む社会文化的意味をも明らかにする。)

伊藤 善啓. 2005.『情報と意味と概念と一発話を考える』現代図書。(情報は提示された対象物として何ら意味を持たない。被験者たちに入力されて初めて意味の発生を見る。情報の概念の意味から首尾一貫性とコンテキストまで、著者の調査の結果と照合しながら、言語行為のメカニズムを考察する)

内田聖二. 2011.『語用論の射程 — 語法からテキストへ』研究社(語用論の情報がかわる言語現象を統一的に説明できる原理として注目されている関連性理論に依拠しながら、語からテキストまでの広範囲の言語現象を具体的かつ詳細に分析する。)

菅原 和孝2010.『ことばと身体 「言語の手前」の人類学(講談社選書メチエ)』(私たちは身体まるごと使って会話している 学生の他愛のない会話、ブッシュマンの一家団欒、伝統芸能の伝承現場…コミュニケーションは言葉の“手前”で身体ごと交わされている!「唯身論」人類学の試み)

木村大治・中村美知夫・高梨克也(編)2010.『インタラクションの境界と接続 — サル・人・会話研究から』京都:昭和堂。(社会的なインタラクションという不思議な現象について、サルも人間もひっくるめて議論したい。そんな目的意識で長い間続けてきた「インタラクション研究会」の成果をまとめた本。サルや人間のインタラクションについて多彩な事例が掲載されている。)

- Kitazume, Sachiko 2010. *How to Do Things with Humor*. 英宝社(Chap.1.Multiplier Effects of Humor. 2.A Visual Study of "Laughter" and "Humor" 3.The Self-deprecating Humor of George W. Bush : Its Functions and Effects. 4. The Malapropisms of George W. Bush : Unexpected Effects of Humorなど)
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子(編). 2011. 『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店 (第1部 理論と方法論(歴史語用論の基礎知識コーパス言語学と歴史語用論—ヘルシンキコーパスの貢献. 文化化と(間)主観化)第2部 ケーススタディー(談話標識(ディスコースマーカ)の歴史的発達—英語に見られる(間)主観化. シャーロック・ホームズの英語に見られる挿入詞の機能. 何を「誓い」、何を「呪い」、何を「願う」のか?—初期近代英語期の裁判と戯曲の世界から. チョーサーの『カンタベリー物語』における呼称. 敬称の筈に踊らされる熊たち—18世紀のドイツ語呼称代名詞 ほか. Elizabeth Traugott先生の論考(和訳)あり)
- 尾谷昌則・二枝美津子(著)・山梨正明(編) 2011. 『構文ネットワークと文法 (講座認知言語学のフロンティア2)』 研究社 (本巻では、認知文法論の観点から、文法の中核となる構文現象(使役構文、結果構文、二重目的語構文、中間構文、受動構文、再帰構文、等)やイディオムなどの分析を中心に、文法の動的メカニズムを明らかにしていく。さらに、能格性・対格性、構文の拡張、構文のネットワークなど、文法現象にかかわる主要テーマを認知言語学の視点から体系的に考察する。)
- 今井むつみ. 2010. 『ことばと思考 (岩波新書) [新書]』 岩波書店(私たちは、ことばを通して世界を見たり、ものごとを考えたりする。では、異なる言語を話す日本人と外国人では、認識や思考のあり方は異なるのだろうか。「前・後・左・右」のない言語の位置表現、ことばの獲得が子どもの思考に与える影響など、興味深い調査・実験の成果をふんだんに紹介しながら、認知心理学の立場から語る。)
- 氏家洋子. 2010. *A Speaker's Cognition Encoded in Japanese —Speech, Mind, and Society*. 三元社. (誰もが他者に伝えたいと思う“心の声”はどの程度「言語化」できているのか。日本語では「やっぱり」「どうにも」「～なんです」等、話し手の心的過程が見事にコード化されている。これに着目して「含過程構造」と命名、ウチ社会でのコミュニケーションの中で発達した姿を英語と対照させて分析。日本の言語文化の理解、日本語教育での活用も視野に。)
- 李在鍋 2011. 『コーパス分析に基づく認知言語学的構文研究』ひつじ書房 (認知言語学の枠組みで、日本語の構文現象の解明を試みた理論的・実証的研究。理論面の特徴としては認知言語学・構文文法に基づく本格的な日本語研究であり、語彙と文法を統合した表現のスキーマから構文現象を定式化した。また方法論面においてはコーパスを使った用法基盤分析の実践を目指している。本書によって日本語研究における構文文法的アプローチの活発化と同時に、コーパス基盤の言語研究が活性化されることを期待する。)
- 辻幸夫【監修】中本敬子・李在鍋【編】 2011. 『認知言語学研究の方法—内省・コーパス・実験』(第1部 実証的な認知言語学研究とは何か(実証的な研究法; 認知言語学と実証的な研究法) 第2部 言語データの収集と分析方法(自作例を使った研究の基礎; コーパスに基づく研究; 心理実験・調査による研究) 第3部 研究例の紹介(作例と内省による研究例1: 「類別詞」と「主体的移動」の認知言語学的研究; 作例と内省による研究例2: 「介在性構文」における介在の検討; コーパス分析の研究例1: 語形の定量的調査 ほか)
- 有光奈美 2011. 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム・認知言語学と語用論の接点』開拓社 (日本語と英語の対比と否定に関する意味のメカニズムを、認知言語学と語用論の視点から論じる。認知基盤、身体性、環境との相互作用等を手がかりに、対比と否定性を認知図式で統合し、発話行為やレトリックまで扱う。否定極性項目、メタ言語否定、対義語と否定性、量から質への意味変化、対比と強意語の関係、完全性の動機、広告表現と対比のレトリック、オクシモロンの基盤にある対比と反対物の一致の視点等を論じる。)
- 武内道子・佐藤裕美(編) 『発話と文のモダリティ 神奈川大学言語学研究叢書』(12名の著者によるそれぞれ研究対象とする言語(日本語、英語、ロシア語、韓国語、スペイン語)におけるモダリティ、モデルについての認知語用論、統語論、意味論の視点からの論考。神奈川大学共同研究奨励助成プロジェクト「モダリティ・プロジェクト」による論集。)
- 鍋島弘治朗 2011. 『日本語のメタファー』くろしお出版 (「明日の光を浴びる」この表現から前向きなイメージを頭に描くのはなぜか。日本語のメタファー表現を、認知メタファー理論の新しい枠組みである、身体性メタファー理論を使用して体系的に分類・分析し、そのメカニズムに迫る)
- 澤田治美 (編) 2010. 『語・文と文法カテゴリーの意味』(ひつじ意味論講座 1) ひつじ書房. ひつじ意味論講座の第1巻。1. 語の意味をめぐって (国広哲弥) 2. 多義性とカテゴリー構造 (松本曜) 3. 文の意味と真偽性 (阿部泰明) 4. 否定の諸相 (今仁生美) 5. 日本語のテンスとアスペクトの意味の体系性 (須田義治) 6. ヴォイスの意味 (鷲尾龍一) 7. 意味役割 (菅井三実) 8. 動詞の意味と統語構造 (影山太郎) 9. 形容詞の意味 (久島茂) 10. 名詞句の意味 (西山佑司) 11. 代名詞の意味 (神崎高明) 12. 不定冠詞の役割 (樋口昌幸)
- 山梨正明(監訳) (深田智・児玉一宏・碓井智子・大谷直輝・木原恵美子・中野研一郎・安原和也(訳)) ロナルド・W・ラネカー(著). 2011. 『認知文法論序説(Cognitive Grammar: A Basic Introduction)』研究社. (認知言語学の泰斗、ラネカーの邦訳、ついに成る! 認知言語学の草創期から現在に至るまで研究の第一線で活躍し、生成文法の強力なオルタナティブを提案してきたロナルド・ラネカー。本書は、大部かつ難解な著作で知られるラネカーが2008年に発表した Cognitive Grammar: A Basic

- Introduction を翻訳したものである。単著の翻訳としては本邦初、日本人研究者待望の一冊である。) 安武知子・小泉直・川岸貴子. 2011. 『ことばとコミュニケーションのフォーラム』 開拓社(言語学、外国語教育、そして文学、これら三つに共通するのは、いずれも「ことば」と「コミュニケーション」にこだわる学問であるということだろう。では、この二つのキーワードをめぐる諸学問は、今日いかなる進展を見せているのであろうか。本論文集は 22 名の研究者たちが「ことば」と「コミュニケーション」の諸相をめぐり、それぞれの専門領域で得られた最新の知見を披露し合うエキサイティングな学問空間(フォーラム)である。)
- 小山亘・浅井優一・吉田理加. 2011. 『近代言語イデオロギー論 記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』 三元社(本書は、「言語」、より一般には「記号」、すなわち、「社会文化的コミュニケーション」の問題系において、イデオロギーは、どのような意味を持つのか、イデオロギーの持つ記号論的、社会文化的特徴はどのように性格づけられるのか、それを明らかにすることにより、言語、方言、語用、記号、社会文化的コミュニケーション、そして、それらを対象とする諸学、全ての学知が、どのような意味でイデオロギー的であると言えるのかを、できるだけ正確に明示する。)
- エレン・ウィナー. 2011. 『ことばの裏に隠れているもの 子どもがメタファー・アイロニーに目覚めるとき 言語学翻訳叢書第12巻』 津田塾大学言語文化研究所(本書は、子どものメタファー・アイロニーの習得過程、それらの習得がなぜ遅いかの解明への試みである。認知言語学などのメタファー研究、発達心理学の「心の理論」、語用論などのメタファー・アイロニー研究をユニークな視点で結びつけており、初等教育における日本語・英語の指導や、障害児の言語理解が注目される今こそ、研究者、学生、自閉症・アスペルガー症候群の子どもの教育者、子を持つ親に読んでほしい一冊である。)
- 小田希望. 2010. 『英語の呼びかけ語』 大阪教育図書(コミュニケーションの中で、話し手と聞き手との対人関係を即座に設定する呼びかけ語。ポライトネスの観点から、対人関係における英語の呼びかけ語の特性およびコミュニケーションにおける語用論的機能を体系的に明らかにする)
- ディアドリ・ウィルスン&ティム・ウォートン(著)・今井邦彦(編) 2009. 『最新語用論入門 12 章』 大修館書店。(ウィルスンらによるロンドン大学での講義を再現! 語用論の基礎から最近の関連性理論まで。意味; 語用論の本質と目的; グライスの語用論; 認知的関連性の原理; 伝達的関連性の原理; 語用論と関連性; 明示の意味と非明示の意味; 語彙意味論へのアプローチ; 概念とカテゴリ化; 語彙的縮小; 語彙的拡張; 概念の転嫁的用法。言語学の一分野として誕生した語用論の入門書 1980 年代に提唱された「関連性理論」だけでなくそこへ至るまでの歴史を概観する。)
- 清水崇文 2009. 『中間言語語用論概論 一第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』 東京: スリーエー・ネットワーク。(外国語を学習する人々の言語能力のうち、「語用論」の側面に焦点を当て、中間言語語用論の諸研究によってこれまで明らかにされてきた多くのことをわかりやすく整理。「中間言語語用論を学ぶための基礎知識」「異文化間語用論」「中間言語語用論」の3部構成。)
- 加藤重広 2009. 『その言い方が人を怒らせる 一ことばの危機管理術』 筑摩書房。(謝罪の場面で真意が伝わらず怒らせる、誤解を与える、だからだと長く続く言い訳文、空気の読めない発言、どこか変な敬語、…。こうしたコミュニケーションの行き違いを生じさせる言い方や表現は、ニュアンスや印象論で語られがちだが、実は言語学的な理由がある。本書では、「まずい」具体例を数多く取り上げながら、言語学の中でも文脈を科学する新しい分野である語用論を背景にその理由を分析していく。知っておきたい、日本語が陥りやすい表現の落とし穴とは。)
- 内田聖二 2009. 『英語談話表現辞典』 三省堂。(語用論的な情報をふんだんに盛り込んだ日本初の本格的な発信型会話・談話表現辞典。約 1,000 項目の日常的会話表現を、談話分析の手法を用いて徹底解析。発話文脈状況を詳細に解説し、対話例を中心に約 5,000 の用例を収録。)
- 許夏玲. 2010. 『意味論と語用論の接点からみる話し言葉の研究』 白帝社(言語理論の観点から言語表現の意味機能と使用実態を考察し、日本語と中国語の対照研究の観点からその背景となる日本語母語話者と中国語母語話者との言語行動の共通点と相違点を分析する。)
- スタニスラス ドゥアンヌ(著), Stanislas Dehaene(原著), 長谷川 眞理子(翻訳), 小林 哲生(翻訳) 2010. 『数覚とは何か?—心が数を創り、操る仕組み』 早川書房。(数をめぐる脳内ネットワークの不思議な実態を明かす明著登場。数の脳内処理に関する第一人者がさまざまな実験の豊富な実例を駆使して、ヒトや動物の数を扱う能力=「数覚」とその意外な実態について綴る)
- マイケル・コーバリス(著), 大久保 街亜(翻訳) 2008. 『言葉は身振りから進化した—進化心理学が探る言語の起源(シリーズ認知と文化 7)』(言語の起源は動物の鳴き声ではなくジェスチャーにあった。刺激に満ちた大胆な仮説を、心理学・言語学・動物行動学などの豊富な研究例を基に、軽快な語り口で説く。複雑で創造性に富んだ人間の言語は、進化の過程でどのように獲得されてきたのだろうか。古くから人々が関心を持ってきたこの問題に対して、本書は手や腕や顔のジェスチャー、すなわち身振りから進化したという説を提唱し、私達が行う何気ない動作の持つ重要な意味を指摘する。最新の研究動向を踏まえた日本語版のための後書きも収録。)
- 開一夫. 2011 『あかちゃんの不思議』 岩波新書。(生まれたての赤ちゃんは、母親を識別できるのか。テレビやロボットをどう捉えているのか。はたして超早期英語教育は有効なのか……。すべての大人が通過した赤ちゃん時代の「不思議」について、脳科学・認知科学における最新の研究成果を紹介、目まぐるしく変化する養育環境が発達にどう影響するのか

について論考する。)

Abbott, Barbara. 2010. *Reference* (Oxford Surveys in Semantics and Pragmatics), Oxford: Oxford Univ Press

Archer, Dawn / Grundy, Peter (eds.) 2011. *The Pragmatics Reader*, Routledge

Bara, Bruno G. 2010. *Cognitive Pragmatics: The Mental Processes of Communication*. Cambridge, MA., MIT Press.

Bousfield, Derek. 2010. *Impoliteness in Interaction*. John Benjamins (Review at LINGUIST List: Vol-22-2246. Fri May 27 2011. ISSN: 1068 - 4875).

Brendel, Elke, Jörg Meibauer & Markus Steinbach (eds.) 2011. *Understanding Quotation*. De Gruyter Mouton.

Bril, Isabelle(ed.). 2010. *Clause Linking and Clause Hierarchy: Syntax and Pragmatics (Studies in Language Companion Series)*, John Benjamins

Corballis, Michael. 2011. *The Recursive Mind: The Origins of human Language, Thought, and Civilization*. Princeton: Princeton University Press.

Enfield, Nick & Tanya Stivers (eds.) 2007. *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*. Cambridge: CUP.

Geurts, Bart. 2010. *Quantity Implicatures*. Cambridge: CUP.

Hasegawa, Yoko. 2010. *Soliloquy in Japanese and English (Pragmatics & Beyond)*, John Benjamins

Horn, Laurence R. (ed.) 2010. *The Expression of Negation*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Jary, Mark 2010. *Assertion* (Palgrave Studies in Pragmatics, Language, and Cognition), New York: Palgrave Macmillan

Meibauer, Jörg & Markus Steinbach(eds.) 2011. *Experimental Pragmatics/Semantics*. John Benjamins

O'Keefe, Anne / Clancy, Brian / Adolphs, Svenja. 2011. *Introducing Pragmatics in Use*, Routledge

Parikh, Prashant. 2010. *Language and Equilibrium*. Cambridge, MA.: MIT Press.

Petrus, Klaus(ed.) 2010. *Meaning and Analysis: New Essays on Grice (Palgrave Studies in Pragmatics, Languages and Cognition)*, Palgrave Macmillan

Recanati, Francois. 2011. *Truth-Conditional Pragmatics*, Oxford Univ Press.

Recanati., François, Isidora Stojanovic, and Nefelí Villanueva.2010. *Context-Dependence, Perspective and Relativity*. De Gruyter Mouton. (Review at LINGUIST List: Vol-22-1972. Fri May 06 2011. ISSN: 1068 - 4875.)

Saigo, Hideki. 2011. *The Japanese Sentence-Final Particles in Talk-in-Interaction (Pragmatics & Beyond)*, John Benjamins

Sbisa, Marina / Ostman, Jan-Ola / Verschueren, Jef (eds.) 2011. *Philosophical Perspectives for Pragmatics (Handbook of Pragmatics Highlights)*, John Benjamins

Sidnell, Jack. 2009. *Conversation Analysis: Comparative Perspectives*. Cambridge University Press. (Review at LINGUIST List: Vol-22-1182. Fri Mar 11 2011. ISSN: 1068 - 4875.)

Soria Casaverde, Maria Belen / Romero, Esther(eds.). 2010. *Explicit Communication: Robyn Carston's Pragmatics (Palgrave Studies in Pragmatics, Language, and Cognition)*, Palgrave Macmillan

Streeck, Jürgen. 2009. *Gesturecraft: The Manufacture of Meaning*. Amsterdam: John Benjamins.

Tanskanen, Sanna-kaisa / Helasvuo, Marja-Liisa / Johansson, Marjut(eds.) 2010. *Discourses in Interaction. (Pragmatics & Beyond)*, John Benjamins Pub Co

Verschueren, Jef and Jan-OlaKey Östman (eds.) 2008. *Notions for Pragmatics: Handbook of Pragmatics Highlights 1* (Review at LINGUIST List: Vol-21-3364. Sun Aug 22 2010. ISSN: 1068 - 4875.)

Watzlawick, Paul / Bavelas, Janet / Beavin Jackson, Don D. 2011. *Pragmatics of Human Communication : A Study of Interactional Patterns, Pathologies and Paradoxes*, W W Norton & Co.

☆☆☆☆☆☆

### 《編集後記》

阪神大震災が発生した1995年1月17日の未明、自分がどこにいてどんな経験をしたか鮮明に記憶しているという方は多いと思います。あのとき「これほどの災害が起こるものか」と呆然としつつ報道に釘付けになったことを私はよく覚えています。2011年3月11日に起きた東日本大震災の惨状については改めて申し上げる必要もないでしょう。あの阪神大震災を大きく上回る状況を目の当たりにして、「あれ以上の惨事が起こるものなのか」と何度も考え込んでしまいました。

語用論学会も被災者の会費免除を検討していますが、人文系のアカデミズムができることは限られています。ことばの運用を研究する学問領域として、語用論にもなにか役に立つことはできるでしょうが、それも長期的な観点からの貢献に過ぎません。つくづく、日常生活の安寧と平和があって初めて、研究が社会に役立つものなのだとの思いを深くしました。もしかしたら、今回の震災は日本に大きな価値観の転換をもたらすことになるのかもしれない。

被災地の復興にはかなりの時間がかかりそうです。原発や首都圏の電力の問題、流通や生産など経済的な影響もしばらくは続くでしょうが、研究や教育に携わるわれわれは早く平時の態勢に戻って、みずからの課題に集中することが必要だと思います。

もう三十年ちかく昔、大学に入学したときに、「槌音」という新入生向けの冊子をもたらしたことを記憶しています。「槌音」から連想したのは「復興の槌音」という表現でしたが、戦後復興を思わせる古めかしい誌名だなあと思いました。今なら、復興の「重機のエンジン音」なのかもしれませんが、字余りであまり心に響かない表現です。「槌音」のほうが、余情があっていいかなと思直しました。

(Newsletter担当：加藤重広記)